



鹿児島県立 出水工業高等学校

- 在籍数 217人(2024年1月31日現在)
- 校訓 「よい人柄」「よい腕前」「よい身体」
- 学科
 - ・機械電気科 [定員80人]
 - ・建築科 [定員40人]



学校の特徴

今年度、創立94年目となる北薩地域の工業高校。設置学科は建築科1クラス、機械電気科2クラス(2年次より機械・電気コースを選択)。生徒の自己実現に向けて「ものづくり・資格取得・部活動」に力を入れ、「すべては生徒の未来のために」の思いで教育活動を展開する。

ものづくり技術・技能の継承に取り組んでおり、県高校生ものづくりコンテスト(木材加工部門)では2023年度、最優秀賞・優秀賞を獲得。出水健児として各部活動で入賞するほか、卒業生は各地で活躍している。

今月は出水工高の3人です

輝け若人

私は幼いころから木材を加工して、物をつくるのが好きでした。小学生のころに京都へ行く機会があり、その際に清水寺を目の当たりにして、私はとても驚きました。太く長い柱や梁を眺めながら、樹種や樹齢、どのよう加工しどのよう



出水工業高校 2年 建築科

梅園 真吾さん

うになりました。そのような思いを抱いて本校に進学し、建築に関する座学や実

きました。充実した学校生活を過ごしていると私思います。私の夢は、人を笑

では触れない、より専門性に特化した内容を学んでいます。ものづくりコンテ

今私があるのは、友人や多くの先生方の支えのおかげだと思っています。常に感謝の気持ちで忘れず、夢に向かって日々練習に励み、住む人が安心して、笑顔になるような家づく

技能士を目指して

に運搬されたのか多くの疑問が湧いてきて、建築について学びたいと強く思うよ

習、製図等に取り組み、多くの資格を取

顔にできるような家をつくること。部活動では、木工部に所属しており実習

スト九州大会にも代表として出場できました。練習でうまくできて本番では力を発揮できず、残念ながら負けてしまいました。これからも技能士を目指し、もっと努力を重ね、さまざまな技術等を身に付けるため努力したいです。



同日欠席の小平田さん含む3人の入賞を関係者全員で喜んだ＝鹿児島市の鹿児島工業高校

鹿工高が入賞

地域再生の「船」に

建築甲子園

日本建築士会連合会(近角眞一会長)が主催する第14回建築甲子園で、鹿児島県代表の

鹿児島工業高校が入賞した。1月31日、鹿児島市の同校で伝達式が行われ、県建築士会の西園幸弘会長らが生徒の力作をたたえた。同校建築系3年生の小平田雄大さん、倉橋庵(いおり)さん、森藤帆(ほり)さん、森たか(たか)さんの作品「地域社会を乗せる・地域の船」は、複合施設に住む住民が内部の食堂や図書館などを運営するコネクティブハウスを提案。コロナ禍を経て地域再生のシンボルとなる船を思わせる建物を考えた。

締め切りが就職活動や他のコンペと重なり、夜まで校内に残る日もあったが、「設計することが楽しかった」と振り返る。倉橋さんは「平面図から立面図に起こす作業が好き」、森藤さんは「使う人の立場で考える時間が面白い」と語った。同日は、欠席した小平田さんも含めて、完成時には達成感を感じた。「納得いくものができたので、入賞と聞いてうれしかった」と声を弾ませた。学びを生かした進路に進む3人に西園会長

森AW監督ら講話

輝北中で立志のつどい 生徒へエール



将来に向けた努力のつけ方など学んだ生徒＝鹿屋市の同校

など講話を行った。今回、立志を迎えた同校2年生11人と1年生や3年生、職員、保護者ら約70人が参加。女子ソフトボールのプ

ロチーム「MORRI ALL WAVE KANOYA」のチーム副代表の前田浩幸氏(森建設総務課長)と、同監督の池田一未氏が

た。池田監督は神村学園中等部の元監督で、「プレーの前に人としてどうあるべきかを考えて指導してきた。宿題をしない生徒に対しては練習を休ませて宿題をさせたこともあった」などこれまでの経験を講話。小路口悠希さん(2年)から、「どうすれば上手くなるのか?」との質問に対しては、「きちんとした挨拶をはじめ、まずは人間性を高めることが大事。それが最終的にプレーにつながる」と答えた。

で、皆さんの先輩。自分が2年生の時に横浜ベイスターズ・前田大和選手のお母さんが担任であった縁で、今も交流があり毎年大和選手と合同練習を行っている」と紹介。また、「他の人に負けないものを一つ持つことが大事。1年間毎朝3時に起きて勉強し、社会保険労務士を取得できた。会社でも自分しか持っていない資格」とこれまでの経験を語り、生徒らから驚きの声があがった。

前田氏は「統合前の旧百引中学校の卒業生は「多世代が集う魅力的な提案。将来は建築士会と共に活動できれば」と笑顔で話した。

父が勤める職場で働くことを夢見て自ら企業選択した璃矩さん。「見て聞いて生かしたい」と意気込み、初日に機械グループの職務を経験した。旋盤作業等で光るプロの技に感動し、製作・設計2グループの業務も体験。「(顧客に)喜んでもらえる仕事ができれば」と未来像を語った。その姿を見守り、助言を送っていた友稔さんは「技術とともに対人関係などを学んでほしい」と各面での成長に期待。田中社長も「わが社の雰囲気を知り、記憶に残ればうれしい。今後も採用につながる一石となるよう積極的に受け入れていきたい」と話した。



旋盤作業に臨む璃矩さん(右)を見守る友稔さん＝鹿児島市のプランテムタナカ

プランテムタナカ

父に憧れ職務迫る

プランテムタナカ(田中義郎社長)は1月29日、南九州市の類娃高校が実施した

インターシップで生徒を受け入れた。同社機械グループに勤務する高崎友稔さんの息子・璃矩(りく)

さんが参加。「父のように」と憧れる中、

父が勤める職場で働くことを夢見て自ら企業選択した璃矩さん。「見て聞いて生かしたい」と意気込み、初日に機械グループの職務を経験した。旋盤作業等で光るプロの技に感動し、製作・設計2グループの業務も体験。「(顧客に)喜んでもらえる仕事ができれば」と未来像を語った。その姿を見守り、助言を送っていた友稔さんは「技術とともに対人関係などを学んでほしい」と各面での成長に期待。田中社長も「わが社の雰囲気を知り、記憶に残ればうれしい。今後も採用につながる一石となるよう積極的に受け入れていきたい」と話した。